

第1章・場面3 カプセル

数時間後、カプセルは東京・調布市にあるJAXA本社・調布航空宇宙センターへ搬入された。研究棟の地下、気密管理されたラボの中央に、黒い防護ケースが置かれている。周囲を遠巻きに囲むのは、物理学、化学・材料工学、情報工学に加え、言語学や人文学など、あらゆる分野から緊急招集された研究者たちだった。

「これからカプセルを開封する。全員、防護を」

所長の声に従い、私も防護服を着込む。息苦しいが仕方ない。未知の物体だ。放射線、化学物質、何が潜んでいるか分からない。

重防護服を着た数名の作業員が、ガイガーカウンターや分光センサーなどの計測器をもって近づく。防護ケースを開き、カプセルに触れた途端——自然にゆっくりと蓋が開いていく。空気が押し出されるような音が響くとともに白い煙が立ちのぼった。何らかのパーティクルだったのか。

いまのところ、センサー類は異常を示していない。直感だが、中身に害はない気がする。しかし、安全確認が済むまで待機の指示は絶対だ。

「早く見たい……」

私は、未知に触れたい衝動を必死に抑えていた。

ようやく作業員が取り出してみせた品物は、想像以上に「人間的」だった。

小一時間ほどで安全確認が終わり、最初の観察が始まる。品物がざっとシートの上に広げられた。

- 紙のような材質の厚い本と綴じられた冊子。
- われわれの光ディスクのように虹色の光沢を放つ、何枚かの円盤。
- 液晶のような表示部を備えた端末らしきもの。

まずは、視覚的に手がかりが得られやすそうな、本から手をつける。厚い本にはびっしりと記号が並び、ところどころにイラストが添えられている。子ども向けの絵本にも似ているが、辞書かもしれない。冊子のほうは、記号の量が厚い本より少なく、図表のようなものの記載が見られる。こちらはレポート系の文書なのだろうか。光ディスクのような円盤は、材質も構造も不明だ。表面には円盤ごとに違った記号が見て取れるが、まずは顕微鏡で調べるのがよさそうだ。そして端末——。われわれが知る人間工学には沿わな

いが、キーやボタンがついており、何らかの操作を意図した形状に見える。ゲーマーだと喜んで謎解きするのだろうか？一瞬そう思ったが、データが消える操作をされても困る、と思い返した。

「.....辞書、何らかの文書。ディスクはおそらくデジタルデータだろう。端末は.....見当がつかんが——」

考え事にふけっていると、言語学者の白石教授が低く呟いていた。はっとして振り向くと、教授はしばらく黙り込み一息ついてから、ゆっくりと口を開いた。

「我々に理解させる意図で送られた、と考えてよからう」

教授がそう言うと、張り詰めていた空気が緩んだ。私を含め、多くの研究員がほっと息を吐く。

「.....解け、と言っているの？」声にならない小さなつぶやきが、思わず漏れていた。

私は光学スキャナーを起動し、辞書らしき本を読み取る。簡易解析を終えた白石教授によれば、文字の種類は十万種類に及ぶらしい。おそらく象形文字を含む表意文字体系になっているようなのだが、まだ詳しくは何とも言えない。

「これは.....漢字や仮名、アルファベットを使い分ける日本人にとっても、かなり複雑な文字体系だ」白石教授が口火を切った形で、場がざわつき始める。

「象形に見えるけど、音も持っているのかな？」「数字の体系を先に解ければ、効率的に構造を読み解いていけるかもしれん」「発音と表記の対応を探すべきだ」「宗教的な象徴の可能性も捨てずに考えたい」

研究者たちが思い思いに口走り、議論は四方八方に散らばっていく。

「.....私たちならできるはず」

混乱とも熱気ともつかないざわめきの中で、私はつい独り言が口に出た。

端末はさらによくわからなかった。画面に触れてみると、何かの記号列が次々と現れる。私たちは推測でとりあえずAIに入力するが、いかんせん教師なし学習では、当分理解のメドが立ちそうにない。

夜が更けてもラボは眠らなかった。世界中の研究機関と接続し、ビジュア越しに数千人の専門家が議論を交わしている。

ディスクを調べた班から報告があがった。「1枚、アナログデータが記録されていそうだ。拡大してみたんだが、この1枚だけ微細構造の凹凸が連続的だ。もしかしたら、昔のレコードのように音声データが記録されているのかも」

だが、再生には、まだ時間がかかるらしい。読み取り装置のセットアップ、変調器の調整、解析の道筋は遠い。

解明には技術、何より執念と根気がいる——それでも。

「きっと解いてみせる」

隣の研究者と頷きあった。